

幼小接続を見据えたことばの教育

——言語獲得のための話しことばと書きことばの接続——

今 宮 信 吾*

抄録 小学校における言語発達の課題は、言語の獲得という点において、音声言語である話しことばと文字言語である書きことばを滑らかに接続させるかという点にある。小一プロブレムやスタートカリキュラムなど小学校側から見た幼小接続は考えられているが、言語ではなく「ことば」として捉えた場合にどのような課題が見られるのか、その論点と今後の方向性について列記した。

キーワード ことばの発達, 幼小接続, 1.5 次のことば, ことば遊び

1 はじめに

初等教育段階における幼小の接続の問題として「小1プロブレム」が指摘されている。その上で、それを解決するためのカリキュラムの作成も求められている。文部科学省も幼小接続とスタートカリキュラムに関連して、以下のように学習指導要領総則で述べている。

「低学年では特に生活科を中核として合科的・関連的な指導の工夫と進め、指導の効果を一層高めるようにする必要がある。特に第1学年入学当初における生活科を中心とした合科的な指導については、新入生が、幼児教育から小学校教育へと円滑に移行することに資するものであり、幼児教育との連携の観点から工夫することが望まれる。」¹⁾

また、国語編では、幼児期の発達の特性に考慮することについて以下のように述べている。

「発達の特性を生かし、生活科など他教科等との関連を積極的に図ったり、幼稚園、保育所、認定こども園における言葉に関する内容などを参考にして国語科の指導計画を作成したりすることが必要である。」²⁾

ここからわかることは、幼児期の発達に即して、小学校の教育を見直すことが求められていることである。そう考えると、スタートカリキュラムという名称は小学校にだけ目を向けたものと考えられる。本来は幼児期から青年期までの大きな発達のスパンでそれぞれの分野の教育について考えるべきであると解釈できる。

本稿では、STEAM教育としての言語ゾーンを研究するに当たって、整理し、考察すべき内容をまとめ、今後

の研究に活かすための項目をまとめてみる。

2 STEAM Lab の役割と言語ゾーンの可能性

STEAM Lab 紀要の創刊号には、その役割として、「言語ゾーン・文化ゾーン・協働ゾーンで得た知見を、教育の現場で求められる能力向上に活かす研究結果の提示」「言語ゾーン・文化ゾーン・科学技術ゾーン・協働ゾーン」で得た知見を、学校環境の質的向上に活かす研究結果を提示すること³⁾としている。

また、『STEAM Lab 紀要第1号(創刊号)創刊にあたって』として以下の記述がある。

「現代では「STEAM教育」を「単一のSTEAM分野の教育」よりも「統合的なSTEAMの取り組み」と捉える傾向にあります。ところで私が研究する「かがく遊び」は、小学校教育以降の理数の学びとつながる「物質」や「現象」と関わる遊びのことでありますが、この「かがく遊び」は、小学校教育以降の理数の学びとつながる「物質」や「現象」と関わる遊びのことでありますが、この「かがく遊び」は「STEM to STEAM act of 2017」(STEAM教育法)の定義でいえば、「複数のSTEAM分野の教育」ということとなります。」⁴⁾

とある。「かがく遊び」を「ことば遊び」と読み替えてみると、ことばの教育がSTEAM教育に果たす役割が見えてくるのではないだろうか。今後、小学校学習指導要領における「ことば遊び」との関連を考察したい。

3 ことばの発達の課題

岡本(1982)は、「子どもとことば」⁵⁾において、ことばの発達を、1次のことばと2次のことばという観点から研究し、その接続の問題が小学校入門期のことばの課

*教育学部教育学科学校教育専攻

題として残っている指摘とした。この課題については、現在は小一プログラムとして指摘されるようになった。国語教育においては、この課題を解決するために話しことばと書きことばをつなぐ働きとして「口頭詩の創出」を幼児期から小学校低学年において行ってきた。著名なのは現在小学校国語教科書でも取り上げられている「せんせいあのね」という教育方法である。これらは現在、北海道において「サイロ」という児童詩誌において展開されている。(2022年2月号において746号を数える。)[「サイロ」の裏表紙には口頭詩として現在も取り上げられ続けている。

「十勝で生きる子どもたちの詩心を育みたい-1960(昭和35)年、同人により児童詩誌「サイロ」は創刊されました。以来、60年にわたって毎月発行を続けております。』⁶⁾

という発刊の方針が示されている。その上で、口頭詩について「小さな瞳から見えるもの」と定義づけ、幼児のつぶやきを募集している。

ことばの発達の課題としては、10歳の壁、言語獲得の臨界期などがある。このことも併せて今後研究を続けていきたい。そのためには、小学校における教科書活用の問題と語彙力調査が必要ともなる。

4 1.5 次のことばとしての詩的表現

筆者は、「幼小一貫カリキュラム創出に向けた基礎研究 -一次のことばと二次のことばをつなぐ言葉の学習-」(2016:今宮・山本)において、1.5 次のことばとして、話しことばと書きことばをつなぐことばの存在を提唱した。1.5 次のことばとは、時枝文法の辞と句にあるように、「今日はひらながなのべんきょうをしてね」などというように、話しことばを書きことばとして表現しているものを指す。一次のことばから二次の言葉への移行をスムーズに行えるようにするためには、幼児期の子どもたちの話しことばを拾い上げ、書き留める口頭詩と小学校一年生の行われる「せんせいあのね」の関連を指摘した。話しことばを書きことばに変換するためには、話しことばを書きことばとして表現することが必要であることを示した。

これらを小学校の教育として実現するためには、詩的表現をさせることが必要ではないかということを考えている。幼児期や小学校入門期においては、語彙がまだ十分に獲得できていない。そうした状況にある時に、自分の持ち得ている語彙を最大限活用させるためには、比喩表現によって話すことが有効である。それらを書き留めて、子どもたちに示し、記録として残すことが幼児期や

小学校入門期の子どもたちに関わる大人の働きではないかと捉えている。このことは、今後学校間接続の課題としてことばの教育に着目した時に解決すべき課題である。幼児期には、文字として書く経験が少なかったものが、小学校に入学すると急速に書くことを求められるからである。文章を書くことを苦手とし、書くことを嫌う原因はこの学校間の接続の問題にもある。これらの解決に関連して、国語教育の問題として学校文法の問題がある。

5 学校文法が持つ課題

日本における四大文法のうち、学校文法として主に取り入れられているのが、橋本進吉による文法である。この文法に対して比較されるのが時枝誠記の文法である。橋本文法が国語教科書の制定される過程の中で、品詞による分類を前提としているのに対して、時枝文法は、言語過程観に基づいた、語を単に集めたものによるものではなく、主体である表現者が文として表現したものである。

学習指導要領では、「知識及び技能」として、語彙力の育成を取り上げているが、語彙ということばから連想することは、特定の日本語が存在しているという宣言的な知識でしかない。時枝文法にヒントを得た手続的知識としてことばの教育を考えていきたい。ここに言語発達ではなく、ことばの発達という概念を持ち込みたい。つまり手続的知識の獲得をことばの発達として捉えることである。

6 おわりに

本稿では、今後の研究の方向性を見出すために、今後研究すべき事項の論点整理を行った。その上で課題となることを列記した。小学校入門期のことばの教育を考えることによって、今後のことばの教育を捉えていけるような視点を盛り込んで方向性とした。

学校現場では、カリキュラム・マネジメントによる教科横断的な学習の創造が求められている。これらは、かつて大正自由教育として展開されたことを繰り返すだけでなく、新たな教育の創造が求められていると解釈している。カリキュラム・マネジメントの意味的変容についても、ことばの発達との関連で、今後考えていきたい。

その手掛かりとしては、戦後日本の教育として展開されてきた、教科の枠組を超えた生活綴り方、児童詩教育という視点も取り込む必要もある。様々な方向性を整理し、新たな学びを問いながら、実践レベルとしての取り組みが報告できるようにしていきたい。まずは、幼小の

ことばの実態調査から取り組んでいきたいと考えている。国語科の教科書の学習基本語彙のみではなく、各教科で用いられる学習基本用語を整理し、そのつながりや言語獲得についても考察できればと思う。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省 小学校学習指導要領総則 東洋館出版 2017
- 2) 文部科学省 小学校学習指導要領国語編 東洋館出版 2017
- 3) 大槻美智子「STEAM Lab 開設にあたって－これまでの経緯と今後の展望－」『大阪大谷大学 STEAM Lab 紀要第1号（創刊号）』2021.3 p 6
- 4) 小谷卓也「STEAM Lab 紀要第1号（創刊号）創刊にあたって」『大阪大谷大学 STEAM Lab 紀要第1号（創刊号）』2021.3 p 10
- 5) 岡本夏木『子どもとことば』岩波新書 1982.1
- 6) 小田豊四郎記念基金 児童詩誌「サイロの会」
<http://www.oda-kikin.com/sairo.html>
- 7) 「幼小一貫カリキュラム創出に向けた基礎研究－一次的ことばと二次的ことばをつなぐ言葉の学習－」プール学院大学研究紀要 第57号 2016 pp 425-439

(2022年3月2日 受理)